

I 研究の概要

1 平成30年度研究主題

「小中連携による、主体的に考え行動する児童生徒の育成」
～伝えることを意図した言語活動の充実を目指して（「読むこと」）～
（3／3年次）

2 主題設定の理由

学校教育においては、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことが求められている。次期学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な、思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協議を促す教育の充実に努めること」と述べられている。これからの社会を生きていく力をはぐくむためには、課題を解決するための様々な能力とともに、主体的に学習に取り組み、共に学びを深める態度を育てていくことが求められている。

本校では小規模で固定化した人間関係の中で、学習の質を高めていくことが課題である。多様な経験や学習を意図的に仕組むことで、目指す資質能力をつけていくことが求められる。特に、国語科において語彙の獲得や読む力の育成のためには、系統的におさえるべき内容や指導事項を学校として共有し、指導を重ねていくことが必要と考える。

このようなことから、本校では3年計画の1年次の研究では、「読むこと的能力を育てる授業の工夫（～相手に伝える音読を中心に～）」をテーマに取り組んだ。音読することへの興味が高まり、音読に意欲を持って取り組む児童も増えた。自分の思いを込め工夫して音読ができるようになったが、長文の読解力については、受け身的で、自分から進んで学習を進めようとする児童が少ないという課題が残った。

昨年度2年次は、活用力向上の指定を機に、「伝えることを意図した言語活動の充実（読むこと）」をテーマに、物語教材を中心に取り組んだ。そこでは、言語活動については、低中高の児童の実態に応じた言語活動を仕組むことによって、児童は興味を持って学習に取り組むことが出来た。また、読みを深めるために行った交流活動では、2・3人のグループでの交流から全体での交流活動を行った。話し手・聞き手・支え手の役割分担も理解でき、話し合いが活発になってきた。しかしながら、授業改革は進みつつあるものの活用力向上の研究の根幹となる活用力の定義についての共通理解が十分でなく、目指す児童像に曖昧さがあるとの指摘がなされた。

そこで、3年次を迎える前に本校区の活用力の定義、目指す児童像を明確にし、そのことを踏まえ研究を進めていくこととした。また、実践を積んでいく中で自分の考えや思いを言葉で表現し、相手との対話の中で新たな知見を獲得していく力が不十分であることも課題となっていることから、児童に伝える目的や方法、内容を明確にもたせる場を設定し、単元のねらいに即した言語活動を学習過程に仕組んでいくことが更に必要だと考える。また、何を話し合うのかを明確にした交流の場を設定することで、相手意識をもって文章を読み取る力や表現する力につながると考え、交流活動の充実も合わせて取り組んでいくこととする。

このようなことから、「読むこと」の学習指導のあり方を改善していくことが必要であると考える本主題を設定した。

3 めざす児童の姿

○佐賀県の教育委員会のめざす活用力

- ・知識・技能等を実社会や実生活の様々な場面に活用する力
- ・様々な課題解決のための想像を立て実践し評価・改善する力

○牛津校区のめざす活用力

- ・授業で身に付けた知識・技能等を、課題解決のために協働して活用する力

○本校のめざす活用力

- ・既知や未知のことをいろいろな言葉で理解し、自分らしい言葉で表現する力
- ・習得した学習内容を、毎時間の終末や単元終末において言語活動で表現する力
- ・学んだことをふり返ったり、これからの自分に生かそうとしたりする力

○相手意識をもち、自分の考えを相手に伝えるために読み取る力をつけ、共に学びを深める児童

下学年	相手意識をもち、主体的に話したり相手の考えを聞いたりして学びを深める児童
上学年	相手意識をもち、主体的に表現し、共に学びを深める児童
特別支援	相手意識をもち、主体的に表現しようとする児童

4 研究の目標

読むことの高めるために、相手意識をもって、言葉の意味や内容が伝わるような言語活動を工夫して読む力を向上させる指導のあり方を研究する。

5 研究の仮説、期待する研究の成果

- ・ねらいを達成するために児童の実態に合った言語活動を工夫すれば、表現することや伝えることに意欲をもち、読むことの高めていくことができるであろう。
- ・交流活動での意見の整理の仕方や価値づけなどの工夫・改善を行うことで児童の読みが深まり、読むことの高めていくことができるであろう。

6 研究の内容と方法、研究の計画

研究の内容

(1) 活用力の向上を目指した授業づくり

- ①習得・活用の流れを単元に入れ込み、学習したことを生かして課題を解決する。
 - ・習得・・・既知や、その時間の交流活動で得たもの。
 - ・活用・・・習得した知識を国語や他の学習の中で活用する。
- ②「何ができるか」を子ども達に実感させるための手立てを工夫する。
 - ・言語活動を入れた単元計画
 - ・子ども達の実態に応じた単元後の明確なゴールの設定
 - ・学びを更に深めるための交流活動
 - ・学習したことを再構築したり、他者との関わりで自分の変容に気づいたりしながら学びを深めていく振り返りの充実
- ③県教育振興課作成の学習の手引きに基づく授業スタイルを確立する。
 - ・授業作りのステップ1・2・3 vol2

(2) 国語科における言語活動を充実させるための手立て

- ① 「読むこと」の力をつけるための効果的な言語活動のあり方や手立てを考え、授業実践を行う。
- ② 言語事項の基礎的技能の習得を図る「スイッチオンタイム」の立案・計画・実践、および、家庭と連携した家庭学習や読書習慣づくりの立案・計画・実践を行う。
- ③ 伝え合う場を設定する。2人組や3人組などのグループでの交流活動を行った後、全体での交流活動を行い、自分の考えを伝えたり相手の考えを受けとめたりして、お互いの考えを高め合う。

研究の方法

- ① 毎月の校内研究及び推進委員会を定期的で開催し、計画的に研究を進めていく。
- ② 授業研究部と研究専門部による二部制とし、各部長と校長、教頭、教務を含めた研究推進委員会を設ける。
- ③ 講師招聘による研修会の開催〈講師：教育事務所、教育センター 指導主事〉
- ④ 全員授業（全校または、グループで）
- ⑤ グループ研の指導案検討会及び模擬授業研究会は各グループの職員で行うが、授業参観については担当以外の職員も可能な限り参観し研究協議に参加する。
- ⑤ 全校研授業の指導案検討会及び模擬授業研究会・研究協議会は全職員の参加で行う。

主体的に学習に取り組む態度の育成

